

8月23日(木)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さんWS 髑髏模様の着物—江戸時代のメディアミックス—

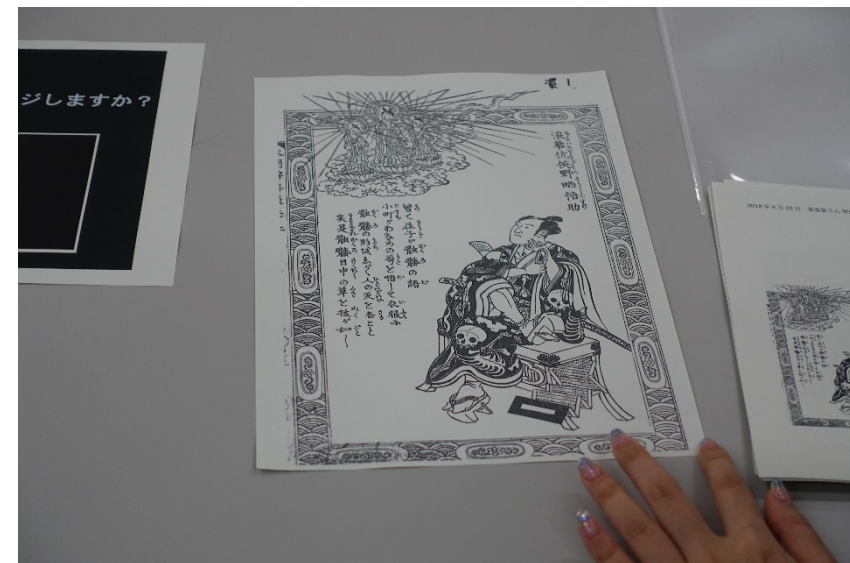
1, 3回目のご来館

梁亜旋^{りょうあせん}さん3回目のWSでは、江戸時代に俗文芸のメディアミックスを通じて浸透していった、あるモチーフについてのイメージについて考えてみました。

2, 髑髏模様の着物を着た人—『本朝酔菩提全伝』—

現代の日本で、いわゆる「髑髏模様」を見せてそのイメージを聞くと、「怖い」「死」「ホラー」「妖怪」「ロック」など、様々な答えが返ってきますが、たとえばその髑髏模様が瓶に貼られたラベルなら「毒」「危険」、旗に描かれていれば「海賊」と、なにかと結びつくことによって特定のイメージを喚起する方が多いと思います。

江戸時代後期、髑髏模様を描いた着物(と、それを着た人)に、ある特定のイメージがありました。このイメージは現代ではほとんどの人が御存知ないと思われませんが、当時は様々なメディアに登場することによって、多くの人に共有されたものであったのです。



8月23日(木)



髑髏模様の着物がある意味を持って初めて登場したのは、山東京伝が執筆した読本^{よみほん}（長編歴史小説）の『本朝酔菩提全伝』^{ほんちょうすいぼだいぜんでん}¹（文化六年〈1809〉刊。）という作品で、野晒^{のざらし}吾助というキャラクターが着ている着物でした。

『本朝酔菩提全伝』は一休禅師の一代記で、悟助は乱暴な性格のせいで一休のもとを去った弟子です。自分の行いを反省した悟助は、月の前半は出家の行いをし、後半は侠客として人助けをすることで、

¹ 国文研請求記号：ナ4-635-1~6。新古典籍データベースからもご覧いただけます

人々の災いを取り除こうと生活しています。

悟助が着ている着物は、小町伝説（小野小町の髑髏が野晒しにされており、目の穴から生えた薄が風に吹かれて「あなめあなめ」という音を立てる／謡曲「通小町」など）を踏まえており、「目の中の薄を取り去る＝人々の災いを除く」という意味を込めたものなのです。



この作品には、仏教的無常観や荘子の思想などをあらかず重要なモチーフとして髑髏が登場しており、基本的には死のイメージを持つものの、悟助の登場によって、「勸善懲悪」の意味を背負った新しい髑髏像が誕生したのです。

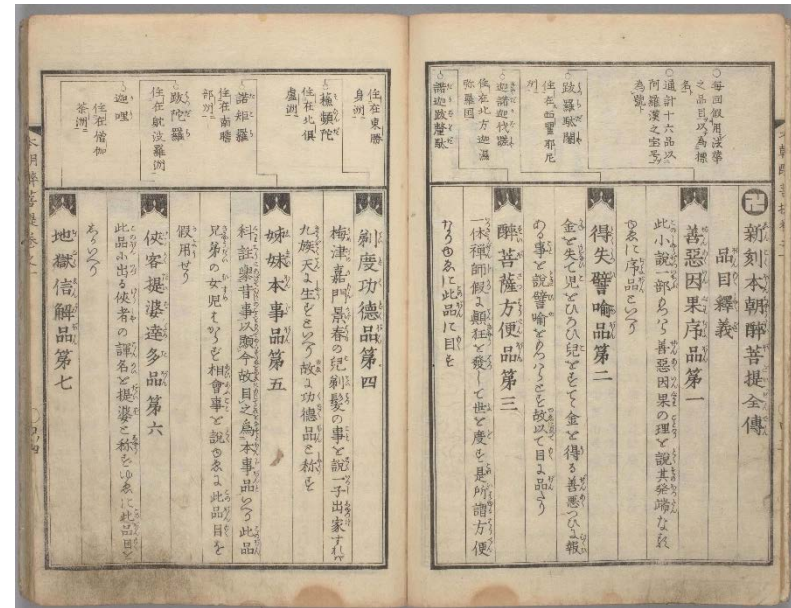
(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200010560/viewer>)。



梁さんは、最初に髑髏模様の着物を見たときには特になにも感じなかったが、元の作品を知ると哲学的な意味が込められており、その奥深さに驚いたと感想を述べられました。

また、当館に所蔵されている『本朝酔菩提全伝』をご覧くださいと、全体が仏典のような雰囲気になっていることに気付かれました。これは一休禅師の一代記という作品テーマに即したもので、装訂をつかって作品世界をつくりあげる読本の特色のひとつです。

古典籍には本文の内容以外にも様々な要素がちりばめられており、原本に接した梁さんは、それを楽しんでおられました。



3,さまざまなメディアに登場する髑髏模様

さて、人気を得た野晒悟助の着物は、その後の作品で「勧善懲悪を行く侠客」のシンボルとして使われるようになります。

それは京伝以外の作者が書いた作品や、読本以外のジャンルでも同様で、そのイメージが作者や読者の間で共有されていたことが分かります。

また、『本朝酔菩提全伝』は後に歌舞伎（河竹黙阿弥作「鶴千歳曾我門松」、元治二年〈1865〉初演）になり、五代目尾上菊五郎が悟助

8月23日(木)

を演じたことにより、髑髏模様の着物を着た菊五郎が役者絵などに描かれ、歌舞伎ファン、菊五郎ファンも、そのイメージに接したのではないのでしょうか。

それだけでなく、強い侠客を描いたシリーズの浮世絵にも好んで使われるようになってゆき、悟助以外の侠客にも、髑髏模様の着物を着せた作品を見ることもあります。

しかしそのイメージが広まった代わりに、当初の複雑な意味合い(小町伝説や荘子、一休など)はそぎ落とされています。視覚的にキャッチーな髑髏模様、一番強烈で分かりやすい勧善懲悪の意味だけが残ったのかもしれませんが。このようなことは、現代でも起こりうるのかもしれませんがね。

4, 現代につながる古典

『本朝酔菩提全伝』の歌舞伎化作品は、現代でも上演されており、最近では平成三十年六月大歌舞伎(歌舞伎座)にて上演されました。五代目菊五郎の当たり役だった悟助は、現菊五郎も演じており、当時と同じ髑髏模様の着物を着て登場しています。

² 「浮世塚比翼稲妻」に登場する不破伴左衛門・名古屋山三郎は対となる役で、不破が着る稲妻模様の衣装と対になる濡燕の衣装を京伝が考案している(『昔話稲妻表紙』)。「NARUTO」のポスターで

このように、江戸時代に読本で作られた衣装が歌舞伎に取り入れられ、現代の舞台に引き継がれている例は他にもあります。

たとえば名古屋山三郎が着ている濡燕の衣装も京伝が考案し、現代でも使われる衣装ですが、八月に新橋演舞場で上演された



「NARUTO」のポスターで、キャラクターがそれを身につけています²、ということを紹介したところ、梁さんは現代で新たに創作され

は、主人公のナルトが稲妻模様の衣装を、ライバルのサスケが濡燕の衣装を着ている。

8月23日（木）

た作品も、昔の人の創作を引き継いでいることに感激しておられました。梁さんも、昔の作品を今にいかすために新たな作品を創作しておられるので、研究者とは違う、創造者としての視点を持たれたことでしょう。

また、漫画作品「ONE PIECE」や「NARUTO」の歌舞伎化も、江戸時代に既にあったメディアミックスと同じだということにも触れておられました。

江戸時代に生じた創造のダイナミズムは、現代にも脈々と受け継がれているのかもしれませんが。それを絶やさないようにしたいと、それぞれの立場で思ったWSでした。